



評価コメント集

受賞提案全11作品につき、下記の順に記載。

【受賞内容】

エントリーNo. 提案タイトル 提案画像（イメージ）※詳細は別途データで確認ください。
受賞者名

受賞コメント（受賞者による事後コメント）

評価コメント（各審査員による評価コメント）

減災デザインプランニング・コンペ2021

全提案者に

コロナの渦中にありながら魅力的な提案をいただいた皆様に心から感謝します。受賞された皆様、おめでとうございます。議論したい課題がたくさんあり、直接会えなかったことが残念でした。応募いただいた皆様の今後のご活躍を祈念いたします。（佐藤）

【最優秀賞】

No.18 「みんなのまちの役割が変化する『まちへん』」 たつのソーシャルインクルージョンプロジェクト (宮崎宏興、池本和弘、福崎千晃)

受賞コメント

この度は、素晴らしい賞を賜り深く感謝申し上げます。
コロナ禍が浮き彫りにした社会課題は、決して非日常のものではなく、日常の地続きとして理解していくこと、地域コミュニティの醸成によって解決すべき本質であると捉えることができました。今後も、『まちへん』を実装するために、自治体や事業者と連携し「うまくいくコト（気づきの速度・モニタリングと対応・学び）を増やす」ための繋がりをデザインし続けたいと思います。



評価コメント

地域社会の住民が自律して日常と災害時をシームレスに繋ぐ実験的提案である。この商店街の『まちへん』が、災害時に向こう3軒両隣を超えて、隣接する『まちへん』と相互の役割を連携するには、日常のマネジメントを担う主体（人材）の育成が課題。その主体の協働の力と情報発信力が『まちへん』を育てていく。実現を期待します。（齊木）

災害時を想定してまちの機能を共有しようという提案で、大変魅力的であった。ただし、コミュニティが限定されるのではないかという疑念もあった。（佐藤）

本当の目的は通常的生活において地域コミュニティが機能すること。審査会当日の説明にあったこの内容に感銘を受けました。滅多に起こらない災害時を想定した仕組みが、実は日常生活のあり方を再考させる点が、発想としてすばらしい。「向こう三軒両隣」といった、かつてあった生活基盤復活の可能性を感じさせ、「減災」を超えようとする提案として高く評価します。（森山）

最優秀賞の「まちへん」には、今年度の提案の中だけでなく、減災デザイン&プランニングのこれまでの数々の提案の中でも抜きん出た新規性を感じました。既存の社会制度、システムが弱体化する中で、頻発し激甚化する災害にどう向き合うかというときに、各々の潜在的な可能性や力をいかに引き出すかが重要だと思われまます。そこで、災害に関する「専門家」だけでなく、広い意味での市民が連なる「まち」が「へん」化する可能性についてのコミュニケーションを促し、その実感を醸成するこのプログラムは、これからの減災デザインの方向性について一石を投じるものだと思います。（宮本）

薬屋さんに薬があるのはあたりまえなので、普段からその店主の隠れた活動も紹介できるとさらに良いのでは。（相良）

社会課題の着眼点は良いが、結実する提案内容は、リアルな社会においての実効性には乏しい机上のゲーム感を覚える。街にあるさまざまな人の生業は、災害時にその人が得意とできる支援分野となることは明白なので、あえて災害時のために「別の」看板を用意する意味があるだろうか。ただ、災害時の（行政や自治組織と企業等との）支援協定を結ぶ方法やその見せ方として効果的なアイデアが含まれているかもしれない。また発案は、啓発イベントの仕掛けとしては活かせるのではないか？という可能性は感じた。（平林）

【優秀賞】

No.17 「puttalco」

杉森丞 神戸芸術工科大学 プロダクト・インテリアデザイン学科4年

受賞コメント

賞を頂いたこと、大変感謝いたします。コロナウイルスが広まって新しい生活様式に変わる今、感染予防の形も変わりつつあります。このプロダクトは新しい形もさることながら、新しい使い方（生活の仕方）の提案でもあります。コロナウイルスのように見えないから対策を怠ってしまうところに、いかに楽に、最小限で行為を誘発できるかを考えて創りました。これが実現の方向に向かうと嬉しいと思います。



評価コメント

ウイズコロナ社会への提案として高く評価できる。例えば日常化したマスク着用と同じように、日常化する手指の消毒を身近な仕掛けに組み込む姿勢は面白い。多様な人々が実装して使った実験成果を検証してほしかった。（齊木）

ボタン型アルコールホルダーの提案で、よく使う指先を手軽に消毒する軽妙な提案であった。（佐藤）

指先で触れざるを得ない視覚障害者にとって有効。これを持っていることを周囲の人にアピールしたいのか（触っているけど安全ですよ）か、目立たなくさせたいのか。（相良）

個々人が除菌グッズ諸々を常に携帯し持ち歩き、都度使うことに、スマートさをもたらせる代替案。ニーズを捉え、具体的即効性のありそうなプロダクトの発案であった。すぐに製品化してみても良いと感じる。実際に使用してみたい。（平林）

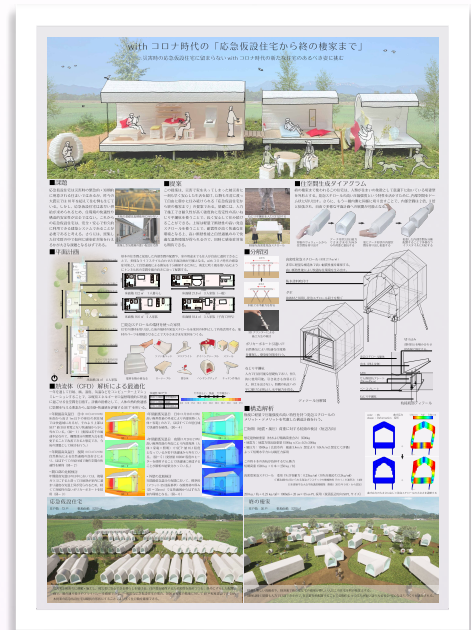
【審査員賞】【齊木 崇人 選】

No.19 「withコロナ時代の「応急仮設住宅から終の棲家まで」」

広島大学中園研究室（中園哲也、福島岳大、田口湧力、山下正太郎、山本千結）、
なわけんジム（名和研二）

受賞コメント

この度は、このような名誉ある賞を頂き有り難うございます。災害後の応急仮設住宅について、ゼロエネルギーでの快適な住環境の確保と、基礎の法適合を目指すことで、二次災害を減災するこの提案を評価して頂いたことを大変有難く思います。この軽量で簡単な工法の住宅の提案が、仮設住宅に留まらず新たな時代の住宅建築の在り方をも切り開くことを目指して、今回の賞を励みに、実現に向けての更なる研究に邁進してまいります。（福島岳大）



評価コメント

すでに世の中に広く普及する発泡スチロール素材を使い、応急仮設住宅から終の住処まで提案する実験的提案である。是非実験してその成果を公開し、応急仮設から終の棲家までの時間を経た成長と変化のプロセスや、素材の再生利用も考察に加えてほしい。（齊木）

妻側の穴をどうやって塞ぐのが疑問です。素材が軽量で受風面積が大きな構造体が台風時どのような挙動をするのでしょうか。（相良）

仮設住宅の基本材料を発泡スチロールとし、しかも1つの塊から何部屋もと、家具を切り出す、という発想は斬新であり、ぜひ試作を見てみたいと感じた。が多くの疑問も同時にある。まずこの大きなスチロールの塊は通常はどこにあるのか。非常時にはどのように運ばれるのか。誰がどう施工するのか。外装はどんな仕上げになるのか。個別のニーズに合致する家具の切り出しはいつ誰が担うのか、等々。そして終の住処とまですることが可能というそのスチロール素材はすでに強度・経年変化における耐久度等の面で特定されているのか？これがもっとも大きな課題か。終の住処とまで欲張らずとも、仮設住宅の新たな提案というだけでも価値はあるとは感じる。（平林）

【審査員賞】 【佐藤 優 選】

No.23 「TOWER+GARDEN × HOUSE+□」

長谷川聡 安田女子大学 家政学部 造形デザイン学科 長谷川研究室、伊藤健生、丸山唯花

受賞コメント

人口が都市へ流出し過疎化と超高齢化が同時に進む北海道白老町は、近く大地震による津波が予見されているが防波堤すらない。

町予算での防波堤建設は現実的ではなく、町民は不安を抱えながら生活している。

具にフィールドリサーチを行いハードに頼らず、いかに災害時に町民を逸早く安全に避難させることができるか、民間資金を活用した集合住宅を建築し、津波避難施設として活用していく提案を減災として評価いただくことができた。



評価コメント

震災時の津波に対応できる中高層の住宅を建てるなら、建物が立つ場所ごとに異なる津波被害のシミュレーションとあわせて、被災後の生活再建プロセスの考察も期待します。（齊木）

提案の基盤となったのは人口16,000人ほどの白老町である。三陸の津波の時に中高層のビルの屋上で救助を待つ姿が印象的であった。しかし、一般的なこの程度の大きさのまちではなかなか需要がないし、大規模な堤防なども困難である。スペアハウスや公益的な観点から避難場所として用意しておく、という発想は、近くに高台がない街では現実的な提案である。実現するためのパターンをいくつか用意しておくと言説力が増すのではないか。（佐藤）

過疎地での避難施設は重要。提案ではリゾート地での別荘としての建設とされているが、公営住宅の立替で高層化しても良いのでは。（相良）

課題の着眼点は良かった。地方自体位の財源逼迫に対し、民間企業活力を活用する案も可能性はあると感じる。が、具体提案には、盛り込んだ諸々のアイデア・要素に必然的な効果を感じられない点も多く、描いた発想の価値を後から理屈づけしている感じがある。必要とされる機能を設計すると、本当にこのようなビルになるのか？を問わなければならない。最も重要な点は、地域の津波避難の拠点として機能するということだ（それは大変結構なことだ。）が、13Fというフロアに設定する根拠がわからない。住民はそこにどのようにアクセスできるのか、しやすいのかもイメージがわからない。ブラックアウトを経験した方としての発案の割には、13Fまでエレベーター移動を前提としている様子で、全フロアを繋ぐ階段の位置が見えない。（平林）

【審査員賞】【森山 明子 選】

No.20 「「ミドリムシとテクノロジー」で、日常を取り戻す！」

千葉工業高校 理数工学研究部（飯島陸、佐藤大誠）

受賞コメント

減災をデザインする、これまで考えたこともないテーマに最初は戸惑いを感じたものの、アイデアを生み出す力、チームワークや表現力、精神面までも成長することができたと実感しています。（飯島 陸）

大学進学模試と重なり、2次審査のオンラインプレゼンには参加できなかったのが残念でしたが、審査員賞受賞の連絡を受けとても感慨深いです。今回のコンテストを励みに、いつか世界で活躍できる人材になりたいと思っています。（佐藤 大誠）



評価コメント

生き物としてのミドリムシは日常の価値観や常識を変える魅力的な未来型素材です。ミドリムシの実験的提案は大きな可能性を生むと思います。ぜひ実験の成果を検証して実現させることを期待しています。（齊木）

近年注目度の高いミドリムシですが、一般的な関心は環境負荷の大きい酪農に代わる食料問題解消のための研究です。でも、この提案はそうした関心をはるかに超え、ミドリムシの特性に注目することで新型コロナ感染を減じる内容なども含み、本コンペの趣旨に合致しています。テーマとプレゼンテーションの魅力は、選考後に応募者が工業高校在校生と知るとさらなる感動をもたらし、私にとって、今回見られた新潮流をもっとも鮮やかに体現する提案でした。（森山）

どれだけの量があれば効果が発揮できるのかが疑問だが、発想としては興味深い。（相良）

ミドリムシの培養で多くの利点をもたらされるという発想は斬新で面白い。このようなパーティーションが日常に浸透している姿のイメージは、多々の社会課題を解決させた先の次世代（未来）のライフスタイルを具体的に想起させる価値がある。ただし、それぞれの機能の効果の提示に具体性が乏しい。例えば、このパーティーションのサイズは？そしてその1台がどんな量の二酸化炭素を吸収したり、発電量がどのくらいになるのか、食用としたら何人分の何回のどんな栄養となるのか、等。盛り込んだ要素それぞれの中でも特に重要と考える要素についてだけでも具体的なプレゼンテーションがなされるなら、説得力は大きく変わったと思う。（平林）

【審査員賞】【荒木 裕子 選】

No.03 「減災えほん ～フェーズフリーの子どもの減災教育～」

田中かずさ、大嶋恭子、齋藤芳徳 茨城大学 教育学部 学校教育教員養成課程 教科教育コース 美術選修 3年次

受賞コメント

「減災」と「絵本」を繋げるアイデアは、子どもの頃に、絵本を読み聞かせしてもらった、楽しい思い出から生まれました。「減災えほん」が実現したら、災害時の助けになるだけでなく、子どもたちの思い出の一つになって欲しいと思います。今回は、「withコロナ時代の減災デザイン」のテーマに対して、アプローチの仕方は、多様であることに改めて気付きました。これからも、減災について、視野を広げて考えていきたいと思いました。



評価コメント

子供に読み聞かせる魅力的な提案である。家族の構成は多様でそれぞれの家族が減災えほんを作り、子供に読み聞かせ、その子供が成長し新たな家族で減災絵本を作り子供に読み聞かせるような循環モデルが生まれそうです。（齊木）

個人から家庭、家庭から地域での段階的な取り組みが示されており、新型コロナウイルスの影響下で、私たちの生活圏を考えざるを得ない状況を反映しているように感じた。（荒木）

デジタル化が進む中で、あえて親が子に読み聞かせる絵本とし、読み聞かせることで双方向のやり取りでよりの確な理解を得ることができるでしょう。読み聞かせマニュアルが必要かもしれないですね。（相良）

普通に「絵本」の発行をテーマにする発案は（当コンペでは）これまでになかったもので、新鮮に捉え高い評価をさせていただいたが、その内容には多くの課題がある。まず、この「絵本」とするテキストがありさえすれば、親から子へ、大切な情報が伝達されるのか？という疑問。また絵本の内容面の質はどのようにもたらされるのか？（ここに提案されている中身は、実際に作られる絵本そのものの内容なのか？だとしたらとても心配。）防災情報の発信は、これまでに多様に行政等も展開・普及に努めているが、それでは大切なことがなかなか一般に浸透しない。だからこそ、どうするべきか、という発案には期待がかかるわけだが、提案されている絵本の中身はその期待を満たすものには遠い。（平林）

【審査員賞】【平林 英二 選】

No.12 「とける絆(ほだし) -震災後10年間から読み解く 新たなランドスケープの提案-」 麻生香実 / 北海学園大学工学部4年

受賞コメント

この度は本提案を選んでいただき誠にありがとうございます。コンペに参加し他の参加者の提案を拝見し、設計のアイデアコンペではなかなか見られないリアリティのある提案や、豊かな発想の提案とたくさん出会うことができ、とても勉強になりました。また二次審査の際には建築の視点からではなく、実際に減災を研究しお仕事にされている方々からご講評をいただいたことが私にとって大きな糧となりました。ありがとうございました。



評価コメント

上下が狭く奥行の長い空間を波状的波が襲うと、引き波と寄せ波が衝突し、上部構造物が破壊されるのでは。（相良）

実際に日本社会で起きた、東日本大震災からの復旧政策における防潮堤のあり方にストレートな疑問を投げかけ、またその解決策として斬新かつ壮大な構想を描いた。ジャストアイデアに留まらず、海岸沿いの地方の街の諸課題を多面的に見つめ総括的な構想の中で多くをより良く改善していく策で満たしている。政治を含めた街全体の構想が故、実際に実現に動くかどうかという点では一人の若いプランナーの立場としては微力で、なかなか難しいかもしれない。が、こうした、社会の課題解決に向けた探究とアグレッシブなプランニングワークに、プランナーが時間を費やすことは大きな意義・価値があると思う。（平林）

【入賞】

No.10 「BUBBLE MAKER」

team NIT（渡辺泰成、伊佐大毅）

受賞コメント

審査員の皆様、この度は誠にありがとうございました。今回の「減災コンペ」に参加したことにより、様々な視点で切り込む提案を多く見る事が出来ました。このコロナ禍での時代において、災害とどう向き合えばよいか考えさせられる、非常に良い経験となりました。今後はより良い提案ができるよう励んでいきたいと思えます。



評価コメント

楽しいアイテムだが、かえって飛散させそうな心配と、アルコールはシャボン玉にはできないので、界面活性剤のみとなる。また、周囲への付着が心配なので、屋外での使用限定か。（相良）

消毒液がシャボン玉となって吹き出す装置はかわいらしく、面白いと感じる。が、液体成分の検討やシャボン放出の技術的な可能性が見えないので、ジャストアイデア的で説得力が不足。実際できたとしても、手消毒の代替になるとは思えず、アトラクション度合いが高い。吹き出すシャボン化した液体が、手だけでなく、ばら撒いて周囲に拡散・付着する、床に落ちればその場を濡らす、いったこと等につき、どこまで考察が及んでいるかがプラン上からは見えない。「除菌はするが、環境には悪影響なし」ということが証明されるのなら、製品化価値が高くあると感じる。（平林）

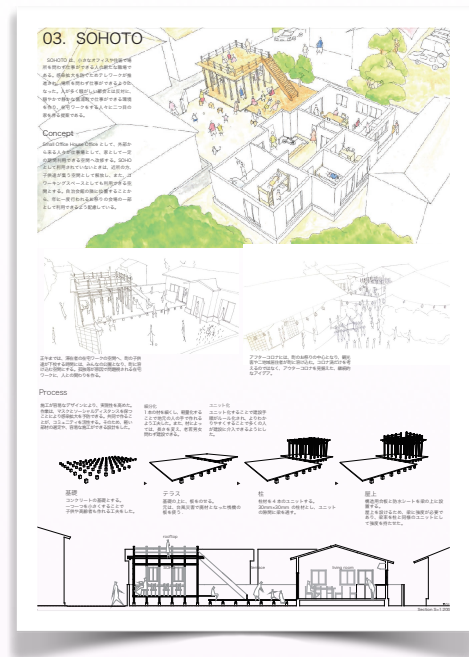
【入賞】

No.22 「SOHOTO」

山崎一慧 芝浦工業大学建築学部建築学科4年

受賞コメント

減災を建築分野の観点から考えました。災害は、突然起こる一時的なものですが、それに備える空間は恒常的なもので、災害が起きる前と後の空間のあり方を深く考えました。私の案は、新型コロナウイルスに対する減災の提案ですが、このコンペティションを通して、様々な分野の減災の提案と出会うことができました。改めて、災害と人、災害と暮らしとは何か考え、減災だけでなく社会問題と向き合うことの重要性に気付くことができました。



評価コメント

18mm断面積の木材だと、反りや捻じれが出やすく、初期の形状を維持できるのかが疑問。床板の接合、柱の固定、など施工上大きな課題が残されている。（相良）

課題の着眼点は良かったが、提案内容の具体性とその魅力に乏しい。ソーホー的、集会所的機能のその建築空間が、どのような具体性でどんな魅力となるのか。その運用をどのようにすれば、もたせたい機能が具体化するのか、等、プランから見えてこないのは残念。（平林）

【入賞】
No.24 「SUKETTO」
太田美桜

受賞コメント

今回は応募した作品に対する対価、またこのような賞をいただき、大変嬉しく思っています。またプレゼンテーションを通じて他の方達のレベルの高い作品を見て、刺激を受けました。審査員の方から頂いたアドバイスや感想なども今後のものづくりに活かしてしていきたいと思えます。本当にありがとうございました。



評価コメント

日常のボランティア活動の団体を非日常の災害時に直ちに転換して支援活動にあたるようにする体制の提案で、やり方を工夫することによって現実的な提案になると考えられた。（佐藤）

被災者・行政・ボランティアをつなぐ情報ネットワークの必要性は高いが、災害時に遠方から訪れるボランティアをどのようにつなぐのか。地域のボランティアと来訪するボランティアの情報ネットワークが課題では。（相良）

着眼点は良い。特に「日常的なボランティア活動が育まれていて、非常時にはその人達が災害時対応で活動する」というのは、ある地域におけるビジョンとして理想的な姿と思う。しかし、アプリがあればそれだけで、そうした社会は実現できるのだろうか？どんなアプリにするか、というテーマの脇には、そのアプリを使って地域のボランティアネットワークを醸成し運用する人材はいるのか、それは誰なのか、というテーマがセットであると感じる。その観点への踏み込みがあってこそ、確かに活かせるアプリ、ツールを生み出す可能性につながるのでは？（平林）